

物語の中の仏教、仏教の中の物語

岡 田 文 弘

一、説話とは何か―煮豆の声を聞く性空上人―

本日は説話についてのお話をさせて頂きますが、そもそも「説話」とは、一体どのようなものでしょうか。現代人らしくGoogleで「説話」と検索してみますと、その上位に以下のような説明が表示されます。

人々の間に語り伝えられた話で、神話・伝説・民話などの総称（デジタル大辞泉）

確かに、この説明で大体合っています。とにかく神話でも伝説でも民話でもなんでも、巷で語られている物語を取りあえず呼称したもの、それが「説話」です。その中でも特に仏教に関連するものを「仏教説話」と言うわけですが、定義としてはずいぶん曖昧模糊としています。それでは、例を一つ見てみましょう。

書寫の上人は、法華讀誦の功積りて、六根淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立ち入れけるに、豆の殻を焚きて豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞きたまひければ、「疎からぬ己等しも、うらめしく我をば煮て、辛き目を見するものかな。」といひけり。焚かるる豆がらはらはらと鳴る音は、「わが心よりする事かは。焼かる、はいかばかり堪へがたけれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ。」とぞ聞えける。（『新大系』一四七頁）

これは、我々にも馴染み深い古典である吉田兼好『徒然草』に収録されている説話です（第六九段）。「書寫の上人」とは、書寫山性空上人（九一〇—一〇〇七）。書寫山円教寺（兵庫県）を建立した、平安時代を代表する『法華經』持經者です。彼は実に多数の伝説を残していますが、その中でもこれは最も不可解なものでしょう。

ある時、性空上人は旅先の宿におりました。その宿では丁度、豆殻を燃やして火を起こし、そこに鍋をくべて豆を煮ておりました。研ぎ澄まされた聴覚を持つ性空上人には、豆が煮立つ音は「なあ豆殻よ、お前は以前おれと一緒にいた仲なのに、今ではおれを煮立てて苦しめているなんて」との恨み言、豆殻が焼ける音は「好きでこうしているわけじゃない。おれだって焼かれて苦しいんだ。恨まないでくれよ」という返事に聞こえた。

……この話は一体何なのでしょう。『法華經』修行者として名高い性空上人が登場することから、一応は「仏教説話」と言うべきかもしれませんが、何の有り難みもありません。しかし一方では、深読みすればいくらかでも深読み出来てしまいうるでもあります。さながら禪問答のような、飄々とした諧謔に満ちています。

ところがこの話には中国に元ネタがあるのです。それは魏の初代皇帝・曹丕と、その弟である詩人・曹植を巡る故事で、宋代の説話集『世説新語』に収録されています（古注釈『徒然草寿命院抄』参照）。

曹丕と曹植は、後継争いのせいで不仲でした。ある時、曹丕は曹植に「七步歩く間に詩を詠んでみろ、出来なかつたら処刑する」と無理難題を言いつけました。すると曹植は「豆殻を焚き、豆を煮る。豆は鍋の中で泣いている。豆殻と私とは同じ根から生まれ、一体だったのに」という詩を即座に詠み、血を分けた兄の非道さをなじりました。そこで曹丕は深く恥じ入ったといひます。

この話は海を渡つて中国から日本へと伝わり、いつの間にか性空上人の話になつてしまつたわけです。一体どういふ経緯があつたのか、はつきりしたことは分かつておりません。¹⁾

このように掴み所のない、しかし人の心をひきつける話が、海をまたいで語り継がれ、書き継がれ……そして語り手・書き手は「これは私の勝手な作り話ではなく、人から聞いた話なんだよ」という顔をして、意図してか、それともしないままか、尾ひれをつけたり省略したり、さりげなく自分の思いを託したりしつつ、新しい話として語つてしまふ……それが所謂「説話」なのです。そんな説話を持つ、いい加減さ、豊かさ、面白さを、今日はお話ししていきたいと思ひます。

二、お経の中の説話―菩薩たちの物語―

さて仏教に係する説話、つまり「仏教説話」は膨大に存在しますが、その発生は菩薩信仰の高まりとパラレルになつております。

仏教の開祖である釈尊は死後にどんどん神格化されていき、その偉大さは今生のみならず、過去世において「菩薩」として修行していた功德が加算されたためと考えられるようになります。そこで、釈尊の前世物語（菩薩時代の物語）

が作られるようになりました。これが所謂「ジャータカ」で、初期仏教教団が伝えた仏教説話です。

一方、その後に興った大乘仏教では、菩薩を「釈尊の前身」に限定するのではなく、我々が目指すべきロールモデルとしました。そこで大乘仏教の經典では、修行者の理想像として多くの菩薩の説話が含まれることになります。

こうして、初期仏教と大乘仏教の双方とも、菩薩信仰の広がりに伴って多くの仏教説話を生み出していったのです。まずは初期仏教の「ジャータカ」を見てみましょう。^② ジャータカとは釈尊の前世物語で、以下の形式を持った説話のことを指します。

- ① 現在世物語（導入部。これから過去世物語を説く由来）
- ② 過去世物語（釈尊の前世＝菩薩時代の物語）
- ③ 結び（②の登場人物が現在の誰に当たるかを明かす）

パーリ仏典の小部には、こうした形式のジャータカが五四七話も集成されています（パーリ・ジャータカ）。その内容は多彩で、インド二大叙事詩『マハーバータ』『ラーマヤナ』や、『イソップ物語』、『千一夜物語』のような仏教ではない文学にも共通する説話を含んでいます。なおジャータカは、既存の伝説を素材として創作されたらしく、そこには民衆文芸と仏教との折衷、格闘、ぶつかりあいが見られます。その結果なのでしょうか、不思議な話もチラホラ見られます。

一例として、パーリ・ジャータカの第七八話「イツリーサ前生物語」を見てみましょう。この話は他の注釈書（『ダ

ンマバダ・アッタカター』にも引かれている³人気作ですが、前述の形式の①②③に当てはめつつ、粗筋を紹介しますと……

①とあるケチな豪商が妻に饅頭を作らせ、こっそり一人で食べようとした。それを見通した釈尊は、自分と僧団に饅頭を布施させようと目論み、目連を派遣。目連は神通力によって豪商を翻弄し、豪商は仕方なく僧団全員に饅頭を振る舞うことになった。以下、その出来事の因縁が語られる。

②昔、イッリーサという名のケチな金持ちがいた。ある時、イッリーサが酒を密造して一人で飲んでいるのを目撃した帝釈天は、彼を改心さすべく、彼の姿に化けてその財産を次々と人々に布施し始めた。驚いたイッリーサは止めようとするが、誰も本物のイッリーサと帝釈天との区別がつかない。そこでイッリーサはお抱えの床屋を呼びつける。実はイッリーサは頭にデキモノがあり、それは床屋しか知らないのだった。しかし帝釈天も神通力でデキモノを現じたので、床屋も区別することができなかった。万事休すになったイッリーサに、帝釈天は正体を現して訓戒し、とうとう改心させた。

③イッリーサは豪商、帝釈天は目連、床屋は釈尊の前世だった。

ご覧になるとわかるように、この話では意外なほど、釈尊が活躍していませんね。そもそもジャータカは、釈尊の菩薩時代を語ってその偉大さを示す説話であるはずなのですが、本話における釈尊（の前世）は菩薩とは言えず、その偉大さも見えてきません。自由奔放な面白話に、無理やり種明かしをくつつけたように見えます。だが、そこが逆

に面白く、説話「らしい」ところでもあります。

こうしたジャータカの多くは、その後に昔話として民間に広まり、はたまた歌舞伎の素材となるなど、広く人口に膾炙しました。これは、そもそも民衆文芸と関わりの深い中で生まれたジャータカが、仏教説話として流布していくうち、再び民衆文芸へと戻っていった現象、と言えるかもしれません。

以上、初期仏典に見られる説話の様相を、ジャータカを一例として見てきました。こうしたジャータカの語りは大乘仏教においても継承され、新しい意義づけがなされるようになります。それではここから、大乘仏典に見られる説話のうち、その代表格ともいふべき二例、『金光明經』収載の「捨身飼虎」と『大乘涅槃經』収載の「施身聞偈」という物語を見てみましょう。この二つの説話はともに、法隆寺に伝わる玉虫厨子の壁面に描かれていることから有名なです。

まず『金光明經』の「捨身飼虎」説話を見てみましょう。

……太古の昔、三人の王子が暮らしていた。ある時彼らは林の中で、飢えた虎の親子を見つけた。三男は、竹で首を突き刺して流血し、高い山の上から虎たちの眼前に投身し、その体を食べさせた。三男は生まれ変わって釈尊となった……。

この説話は捨身品第十七において、同経のクライマックスとして披露されますが、その構成の理由は、同経の冒頭部である寿量品第二を見ると明確になります。寿量品第二ではその題名が示唆する通り、仏（釈尊）の寿命が量り知

れない永遠のものであるという最重要の教理が説かれます。そして同品は、釈尊が永遠の寿命を獲得した要因は、「不殺」（殺さない）と「施食」（食べ物を与える）という二つの行をおこなった功德によるものだと言っています（『如佛所説有二因緣壽命得長。何等爲二。一者不殺。二者施食。』『大正』一六・三三五下、二〇―二一行）。

では具体的に、釈尊はどのように「不殺」と「施食」を行じたのでしょうか。それを明かすのが、捨身品第十七における「捨身飼虎」の説話であるわけです。釈尊は過去に飢えた虎を救うため、他の動物等の血肉を餌として与えることなく（＝不殺）、自分の肉体を食べさせた（＝施食）。寿量品第二で明かされた釈尊の永遠性は、こうやって獲得されたのだよ、と。

このように『金光明經』では、その最重要教理（如来の永遠性）の「種明かし」を、説話を語ることによって行なっているわけです。同經の作者たちが、いかに説話を重視していたかが伺い知れるでしょう。

続いて、『大乘涅槃經』に見られる「施身聞偈」の説話を見てみましょう。

……雪山で法を求め修行していた童子の前に羅刹が現れ、「諸行無常 是生滅法」という偈を教えた。そして羅刹は「この偈の続きは、その身体を布施してくれたら教えよう」と童子に持ちかけた。童子はこれを承諾し、後半「生滅滅已 寂滅爲樂」を聞いた。童子はこの偈を石・壁・樹・道に書きつけると、木の上から羅刹に向かって身を投げた。すると羅刹は正体（帝釈天）を現して童子を助けた。この童子が生まれ変わり、釈尊となった……。

これが「施身聞偈」の説話です。実はこの説話は大有名で、類話は他の經典や仏伝にも多く見られます。しかし、

偈を「書きつけた」という挿話が見られるのは、この『大乘涅槃經』のバージョンのみとなっています。¹⁾

代表的な大乘仏典であり、大乘とは何かを追求した經典である『大乘涅槃經』……そこに収められているバージョンの「施身聞偈」説話のオリジナリティが、「書きつける」という挿話にあることは、大いに注目すべき点です。これは、大乘仏教で重視される写經の功德を見事に示しており、また、口承を重んじる初期仏教に対し大乘仏教のアイデンティティが「書きつける」こと（書記）にあつたことをも暗示しています。²⁾そして更に、この「口伝えから書記へ」という転換は、説話というジャンルを考える上でも、多くの示唆を与えてくれます。

説話は巷で語られている話、つまり本来は口承文芸なのですが、これが筆録されることで「説話文学」という書承の文芸になるわけです。説話文学研究のバイオニアである益田勝美氏は、その定義を次のように示しています。

説話文学は説話そのものではない。……一口にいえば、それは口承の文学である説話と文字の文学との出会いの文学である。それぞれに異なる点を持つ二つの文学の方法が、助けあったり、たたかいあったりしてできる、文字による文学の特別な一領域である。（益田「二〇〇六」四七頁）

「口承」と「文字」とが、助け合い、戦いあって生まれた、新しい文学……それが「説話文学」だと言うわけです。それでは次に、そんな「説話文学」を生み出すことを一生の仕事とした人物について見てみましょう。舞台を日本に移し、鎮源という平安時代の天台僧をご紹介します。

三、鎮源『法華驗記』の視座

鎮源（生没年不詳）は比叡山の首楞嚴院に住していた僧侶で、平安時代の長久年間（一〇四〇—一〇四四）に『法華驗記』（全三卷、一二九話）を編纂します。同書は題名の通り『法華經』の靈驗まつわる説話を集めたものであり、日本の仏教説話の歴史においてエポック・メイキングとも言える作品です。その序文において鎮源は、次のように高らかに宣言しています。

往古の童子は半偈を雪嶺の樹石に銘し……粗、見聞を緝め、録して三卷と為せり。（『日思』四四頁）

このように鎮源は、「往古の童子は半偈を雪嶺の樹石に銘し」として、前述の雪山童子の捨身行を自分の説話集編纂の「先例」として挙げています。やや大げさに聞こえるかもしれませんが、鎮源にとって説話を集め筆記し「説話文学」を生み出すことは、まさに不惜身命の求法と比せられる営為だったのです。

しかも鎮源はそれにとどまらず、自ら作中の主人公となって、自身の編集作業を「説話」化してさえます。本書第二話は東大寺の大仏建立の立役者として知られる行基（六六八—七四九）の伝記ですが、そこに鎮源はこんな注記を付け加えています。

抑も此の驗記に、行基菩薩を入れざりき……然れども夢に宿老有り。欄衫の姿にて此の驗記を取りて、外従り奥

物語の中の仏教、仏教の中の物語（岡田文弘）

に至るまで両三反被見し、畢へて言を作さく、行基菩薩は日本第一の法花持者なり。……此の夢告に驚きて後、之を入れ奉る所なり。（『日思』五三―五四頁）

元々、この『法華驗記』には行基伝を入れる予定がなかったのだが、夢に不思議な老人が現れて本書を読み、「行基の伝記を追加しなさい」と注文を付けたので、収録することにしたのだ……と。

「尊格・靈的存在が夢告で因縁を伝える」という形式の靈驗譚は、鎮源が多く収集し同書に収録しているものです。その形式を借りて、鎮源は自身を主人公として、自身の説話編集作業を神秘的な啓示に基づくものとする新作の「説話」を作り出しているのです。⁷⁾

このように、説話への熱意と愛着に溢れつつ編纂されていった『法華驗記』には、実に多彩な『法華經』功德譚が収められています。特に有名なのは動物の救済譚が多いことで、蛇（第一二九話他）、ミミズ（第三〇話）、キリギリス（第八九話）、紙魚（第七八話）、牛（第一〇六話他）、鼠（第一二五話）、猿（第一二六話）、狐（第一二七話）など、様々な生き物が『法華經』の靈驗に浴する様が活写されています。

このように『法華驗記』は、機根が劣っていたり悪かったりする者に到るまで、あらゆる存在にもたらされる『法華經』の功德を描いています。この姿勢は、各巻末に（まるでエンディング・テーマのように）付されている詩（偈）の一節に「見る者も聞く者も、讃える者も誇る者も、等しく成仏する」（「見聞讃誇齊成仏」『日思』五二九頁下・五四六頁上・五六九頁上）と端的に表されています。信者だけでなく、不信心の者にも功德が及ぶと言うのですから、『法華驗記』は本当に幅広い救済を志向していたと言えましょう。

四、『法華伝記』と日蓮聖人

ところでこの「見聞讃謗齊成仏」という詩節は、本書に先行する中国唐代の法華説話集『法華伝記』（僧祥撰）に、その典拠を持つと指摘されています（市岡〔二〇一三〕）。

乃至見聞讃毀者 順逆俱証無生忍（『大正』五二・四八下、一二行）

見る者も聞く者も、讃える者も毀する者も、順縁（順当な縁）・逆縁（順当ではない縁）ともに最高の悟りを得る……。こうした『法華経』は、その誹謗者までもを救済する」という『法華伝記』の視座は、前述した『法華験記』に継承された他、更には日蓮聖人の仏教の中心ともなりました。日蓮聖人は『法華経』への誹謗（謗法）を墮地獄に値する重罪として厳しく弾劾しますが、その謗法すら「逆縁」となり、仏道に入り仏果を得る遠因と説いています。⁹⁾

ここで着目すべきは、日蓮聖人が『法華伝記』を読んでいたという事実です。日蓮聖人はその著作『法蓮抄』に『法華伝記』巻八の説話（書寫救苦第十之二の六「李遺龍」）を引用しており、「此状は漢土の法華伝記に候。」（『定遺』九四九頁）と出典を明記しています。同話は、反仏教者（熱心な道教の信者）だった亡父に背いて『法華経』各品の題名を書くことになった書家が、それによって亡父の霊を救うことになったという物語で、逆縁たる謗法者の救済、そして題目の功德を生き生きと説いた説話です。日蓮聖人が引用するのも、さもありなんという内容でしょう。

更に着目すべきは、『法華伝記』には唱題（南無妙法蓮華経と題目をお唱えする行）の功德を説いた説話が含まれて

いることです。唱題は言うまでもなく日蓮仏教の中心であり、しかも日蓮聖人以前には若干の例外を除いて、あまり知られていない行でした。¹⁰ その数少ない例外の一つが、この『法華伝記』なのです。ではここで、『法華伝記』中の唱題功德譚を見てみましょう。

「宋法華臺沙彌」巻五、諷誦勝利第八之三の十九

とある愚かな沙弥がいた。彼は経を一夏かけても三行程度しか覚えられなかった。悲しみにくれた沙弥は高い崖から身を投げ自殺した。先業によって鑊湯地獄に堕ちた彼は、獄卒が罪人を責めている姿を見て、思わず『法華経』の題目を唱えた。すると罪人たち全員は蓮華に座し、地獄は涼しい池に変貌した。沙弥は生き返り、このことを人々に語り伝えた。

「潯陽湖海女」巻九、聽聞利益第十一の十一

魚屋の老女が死後、閻魔の裁きを受ける。生前の善行を問われた老女は、ある時大雨で足止めされた折にたまたま『法華経』の講説を聞いたことがあったと答える。この功德が認められ赦免されることになるが、その前に漁師たちが（殺生の罪により）地獄の責め苦に遭っている様子を見せられる。そこで老女は「南無妙法蓮華経」と声を上げて唱えたところ、たちまち彼らは消え失せた。閻魔が言うことには、罪人たちの罪は消え、昇天してしまったとのことだった。やがて老女は生き返り、このことを人々に語り伝えた。

これら両話の共通点は、唱題を①愚者・劣機が行なっている。そして②他者に功德がもたらされている。この二点です。

まさにこの二点が、日蓮聖人による唱題信仰……末代の凡夫に最適の行として唱題を勧める姿勢、そして、自利利他ともの救済を目指す宗教的理想につながっていくのではないだろうか。難解な教理書だけでなく、平易な説話文献の中に、日蓮聖人が唱題信仰を確立する上での「核」となった要素が秘められていたのではないか……そのように私は考えています。

五、まとめ

以上、駆け足でしたが、「説話」とは何か、特に仏教において説話がどのような意味や働きを持っていたかについて、皆さんと一緒に見てまいりました。

今日の話から浮かび上がってくるのは、「深遠な教理論・宗教哲学だけで仏教をはかると、そこからこぼれ落ちてしまうものが出てくる」ということ、そして、「それをすくいとっているのが仏教説話」という事実ではないでしょうか。だからこそ仏教説話は、かように豊潤な世界を持っているのでしょう。その世界の一端に触れて頂けたならば、幸いです。

ご静聴ありがとうございました。

《注》

- (1) 稲田「二〇〇五」八頁下参照。
- (2) 本稿におけるジャータカの基本的説明は拙稿、岡田「二〇一四」を下敷きとした。
- (3) 田辺・中村「一九八七」訳注（三六九頁上）参照。
- (4) 岡田「二〇一五」参照。
- (5) 大乘における書記の意義については下田「二〇一一」参照。
- (6) 岡田「二〇一六」参照。
- (7) 岡田「二〇一七」参照。
- (8) なお同書には、その具体例を示す説話として、以下のような説話が含まれている。とある婦人が『法華経』の経巻を踏みつけて地獄に堕ちたが、その踏みつけた足に金色の経文が現れ、それを見た閻魔大王が喜んで放免したという……（『唐襄州優婆塞後妻』卷九聽聞利益第十一の二十二）。日蓮遺文『上野殿御返事』（真蹟・直弟写本無し）に類話が引かれている（『定遺』一六三三頁、渡邊「一九三三」二六六頁参照）。
- (9) 「あわれなるかなや、なげかしきかなや、日本国の人皆無間大城に堕ちむ事よ。悦しきかなや、楽かなや、不肖の身として今度心田に仏種をうえたる。」（『撰時抄』『定遺』一〇五二頁）
- (10) 日蓮に先行する唱題については高木「一九七三」第八章、戸頃「一九七〇」五〇九頁等参照（『法華伝記』当該説話については、高木同上四三二・四四〇頁、戸頃同上）。

《略語》

- 『大正』——高楠順次郎編『大正新脩大藏経』全一〇〇巻、大正一切経刊行会、一九二四—一九三一
- 『定遺』——立正大学宗学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻、身延山久遠寺、一九五二—一九五九
- 『日思』——井上光貞・大曾根章介校注『往生伝 法華験記（日本思想大系七）』岩波書店、一九七四
- 『新大系』——佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記 徒然草（新日本古典文学大系三九）』岩波書店、一九八九

〈参考文献〉

- 市岡聡『法華驗記』と『法華伝記』の関連性『仏教文学』第三八号、二〇一三、一二八—一三八頁
- 稲田利徳『徒然草』と『宝物集』『岡山大学教育学部研究集録』第二二九号、二〇〇五、一一—二頁
- 岡田文弘『ジャータカ』養輪顕量編『事典 日本の仏教』吉川弘文館、二〇一四、三四—三八頁
- 岡田文弘『説話集はなぜ編まれたのか（『法華驗記』とその関連文献）』『全南大学・東京大学大学院生学術交流シンポジウム』二〇一六、四一—四八頁
- 岡田文弘『説話の創出——鎮源『法華驗記』第二話「行基菩薩」注記——』『印度學佛教學研究』第六六卷第一号、二〇一七、二二五—二二九頁
- 岡田真美子『《一切衆生喜見菩薩説話》のパラレル研究』『印度學佛教學研究』第六四卷第一号、二〇一五、三二三—三三〇頁
- 下田正弘『經典を創出する』高崎直道監修『大乘仏教の誕生（シリーズ大乘仏教2）』春秋社、二〇一一、三七—七二頁
- 高木豊『平安時代法華仏教史研究』平楽寺書店、一九七三
- 田辺和子・中村元『ジャータカ全集』二、春秋社、一九八七
- 戸頃重基『解説』『日蓮（日本思想大系一四）』岩波書店、一九七〇、四七一—五七二頁
- 益田勝実『説話文学と絵巻 益田一実の仕事Ⅰ』ちくま学芸文庫、二〇〇六
- 渡邊泰道『日蓮聖人御遺文講義』第十四卷、龍吟社、一九三三

〈キーワード〉 仏教説話、『法華経』、『法華伝記』、『法華驗記』、日蓮